

令和5年度 学力向上指導改善プラン

三田市立狭間小学校長 佐野 秀樹

学校教育目標		豊かな心で、自ら考え行動できる子の育成			
推進主体		学力向上推進委員会 (校長、教頭並びに学校改革、教育計画、学校評価、研究推進、生徒指導、保幼小・小・中連携の各担当)			
学力に関する前年度の状況・経年の課題等					
学力 の 状 況	全国学 力・学 習 状 況 調 査 結 果 の 状 況 (国語、 算数・ 算数・ 数学に 関する 質問紙 調査の 結果も 含む)	国語	<ul style="list-style-type: none"> 話しこと・聞くことの領域は良好な結果で、力がついてきていると思われる。 ◆物語文で、人物増を具体的に想像したり、描写を基に考えたりする設問で、正答率が低い傾向にある。 ◆注意深く問題文を読み、問われていることを理解できていないことで、正答できていない児童が多い。 		
		算数	<ul style="list-style-type: none"> 「データの活用」の領域で、全国平均より高い正答率であった。 ◆基本的な計算技能は、おおむね身に付いている。 ◆式の意味を理解したり、文を読み取り立式したりすることに課題がある。特に、比例関係を使って正しい答えを求める設問において、不十分な説明や式になっていないなど、解決の方法を数学的に説明することに課題がある。 ◆角度について、どこをかくとみるのかの理解や角の量感等に課題が見られた。 ◆日常の事象を数値的に捉え数学的に表現・処理することに課題がある。文や図から必要な情報を取り出し、活用することに苦手意識を持っている児童が多い。 		
		ICT機器 を効果的 に活用 した 状態	<ul style="list-style-type: none"> 個人タブレットで、自分の意見を書き込んだり、他者の意見や考え方と比べたりする機会を増やすことで、個人の思考を深めることができた。 ICT機器の活用により、授業中の必要な時にノートの提示ができるようになり、ノートを使って発表したり、意見を交換したりする活動を取り入れられるようになった。 ◆タブレット活用について、学年に応じて身に着けたいスキルについて、さらに整理し、誰もが使えるようにしていく必要がある。 		
		定期テスト、単 元 テ ス ト な ど に よ る 状 況 (各 教 科)	<ul style="list-style-type: none"> ◇日ごからのドリル学習などの継続的な取り組みが、漢字や計算技能の向上につながっている。定期テストでも結果となって表れてきたと思われる。 		
	授業等からう かがえる状況 (各 教 科)	<ul style="list-style-type: none"> ◇授業の流れとして「めあて」と「振り返り」を意識して展開してきた。見直しをもって学ぶ姿勢が身についてきている。 ◇朝学習により、学習へのスムーズな流れが身についてきている。 ◆学習に対して、やや受け身な傾向にある。主体的に学習に取り組む子どもたちを目指し、さらに授業改善に取り組む必要がある。 			
	学力 向 上 に 係 る 学 習 習 慣 ・ 生 活 習 慣 等 の 状 況	<ul style="list-style-type: none"> ◆家庭学習の手引きを配布し、家庭学習の指標として活用を促した。家庭学習が習慣化してきている。 ◇「漢字ノートコンクール」や「自由ノートコンクール」を行い、全校生が目にする場所に掲示することで、他者のがんばりを認め、自分の学びに活かそうとする意欲につながった。 ◇学校評価アンケートにおいて、児童の84%が進んで家庭学習に取り組んでいると評価している。 ◆本校独自の振り返りシート「はさまっノート」で、家庭学習について振り返る項目を作り、自己評価するとともに、家庭との連携を高める。 ◇司書教諭との連携により、年間学習計画に必要な図書をクラスに用意するなどして、調べ学習等読書活動の広がりがつながり、図書を活用する機会が持てた。 ◇読書通帳達成賞や年間百冊読書賞、ステージ別読書賞などを継続して行うことにより、多読につながり、幅広い分野の読書に児童が興味を持っていた。 ◇読書週間の設定で、朝読書により落ち着いた学習に導入できている。 ◇親子読書カードの取り組みで、家庭読書の定着をはかろうとしたが、家庭によって取り組みに差があった。より取り組みやすい方法を考える必要がある。 ◆学校教育評価アンケートにおいて、約81%の児童が本を読むことが好きと回答しているのに対して、保護者は49%と開きがある。 			
	校 内 研 究 ・ 研 修 の 状 況	<ul style="list-style-type: none"> ◇長年外国語教育を研究していく中、昨年度は英語専科が導入されたが、中学年以下で何を大切に授業を計画していけばよいか、研修を重ねた。 ◇コロナ禍においても少しずつコミュニケーションを伴う活動できるようになってきた。ICT機器を用いるなどして、工夫して対話学習を取り入れることができた。 ◇オンラインを活用し授業公開することで、それぞれが授業を視聴し授業研究会に臨めた。授業研究会での学びが次の研修に活かされた。 ◇研究テーマに沿った指導内容・指導方法の研修を行い、教師間で共通理解を図れた。 ◆外国語教育以外の新たな研究課題も設定し、全教職員で研究を推進していく。 			
	校 内 研 修 の 状 況	<ul style="list-style-type: none"> ◇児童理解研修会や、毎月の職員会議や委員会などあらゆる機会を捉え、全職員が児童一人一人を共通理解する機会をもった。児童の様子や変化を共有し、深い児童理解に努めた。その結果、多くの児童が安心して学校生活を送っている様子が、学校評価アンケートにもあらわれていた。 ◇各担当より、計画的に職員研修が行われた。ICT機器の活用についても、実践交流を行った。 ◆タブレット端末を活用した授業やデータ処理、統計処理の方法など、積極的なICT機器利用に向けて研修を行い、教員の資質向上に努める。 			
	家 庭 ・ 地 域 等 の 状 況	<ul style="list-style-type: none"> ◇感染対策を行いながら、保護者や地域の方にボランティアとして学習支援をしてもらう機会を少しずつ広げていった。図書ボランティアや登下校の安全指導、ミニボランティアなど工夫して見守っていた。 ◇学校地域運営協議会において、児童の学校生活の様子や学校のコロナ対応の様子の見学を通して、児童や学校運営について意見交流することができた。 ◆地域ボランティアと学校をつなぐ、コーディネーター的な人材を今後も探す必要がある。 ◆学校、地域、保護者がそれぞれの立場で、児童に対する役割や連携することが意義について話し合う機会を設定することも必要である。 			
	小・中 に お け る 教 科 連 携 等 の 状 況	<ul style="list-style-type: none"> ◇専科教員と高学年担任の交換授業による教科担任制で、教師の専門性を生かした授業を行うことができ、児童は興味を持って授業に臨んでいた。 ◇小中連携の意見交流会で、生徒指導上・特別支援上の視点で情報交換を継続的に行っている。 ◇全国学力・学習状況調査の合同分析を行い、課題と取り組みの具体について、共有を図った。 ◇コロナ禍で制限がある中、オンラインで小学校の授業を関係学校園所に公開することができた。 ◇中学校教員による出前授業や中学校生徒会による中学校生活についてのプレゼンやあいさつ運動など中1キャップ解消に向けた取り組みができた。 ◆特別支援コーディネーターの交流があまりできなかった。連携を図っていく必要がある。 			
4月					
学力向上に向けての重点的な目標		成果となる目標	具体的な行動目標		
(指標となる数値等)		(成果目標達成のための具体的な手立て等)	年度末評価		
(今年度の成果と来年度に向けた課題等)			評価		
A 個別最適な学び・協働的な学びを意識した授業の確立	<ul style="list-style-type: none"> ◆めあて、学習の流れの提示により、ユニバーサルデザインの授業づくりを意識する。 ◆めあてを意識した振り返りをさせる。 ◆課題設定の工夫、効果的な言語活動、相互交流に重点をおいた授業展開をする。 ◆授業形態の工夫をする。 ◆主体的な学びに重点を置き、探究的な学びのプロセスを大切にします。 	<ul style="list-style-type: none"> ◆学習の流れの提示の仕方を校内で統一し、個々が何を、どの手順でどのように学ぶのか、めあて・見直しをもって粘り強く学べるようにする。 ◆めあてを意識した振り返りを行うことで、何ができるようになるのか、何ができるようになったのかメタ認知し、自己調整力を養う。 ◆個人思考を深めるためには、ペアワーク、グループワークは欠かせない。多人数の学級でも多様な授業形態がとれるよう、ホワイトボードやタブレットの活用など、多様な学習方法も検証する。 ◆「わかった」「おもしろい」と思えるような授業を展開する。 ◆どの授業でも子どもの疑問を大切に、課題意識を持って取り組めるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ◇児童はアンケートで「学習に進んで取り組んでいる」86.8%、「好きな教科がある」92.8%と答えており、多くの児童が授業に関心を持ち、意欲的に授業に取り組んでいる。 ◇授業中の制限がほとんど無くなったことにより、多様な授業形態を取り入れることができた。少人数で話し合ったり、タブレットで考えを交流したりすることで、個人・集団の思考を深めているようにした。 ◆めあてをもって学習に取り組む、振り返りを行うことで児童が自らの学びを確認できた。 ◆コロナ禍の名残もあって、学校外での学びの場が十分に設定できなかった。児童にとってより魅力的な授業づくりをしていく必要がある。 	B	
B 思考力・表現力の育成 ○基礎基本の充実	<ul style="list-style-type: none"> ◆言語領域、計算などの技能領域の力をつける。 ◆四則計算が正確にできる児童の割合を、90%以上にします。 	<ul style="list-style-type: none"> ◆言語領域(漢字)の学習については、漢字テストなどで日々達成を確認し、個々のサポートに生かすとともに、隙間時間を利用してドリルワークなどを活用することで反復練習を行い、定着を図る。また、意欲的に取り組めるよう、評価を工夫する。 ◆計算力をつけるため、継続的なドリル学習やプリント学習で四則計算の定着を図る。また隙間時間や朝学習の時間にはドリルワークを活用し、反復練習を行い、定着を図る。 ◆新学習システム教員との連携や、「がんばりタイム」の活用で、個々のつまづきに応じた支援ができるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ◇朝学習や家庭学習で繰り返し練習することで、漢字や計算などの基礎基本の力は定着してきている。算数科では新学習システム教員との連携や少人数学習で、個に応じた指導の効果が出ている。 ◇「がんばりタイム」の活用や放課後の補充学習で、個別の指導を工夫した。早期からのつまづきに対応していくため、ドリル的な学習ソフトをより活用していきたい。 ◆学力学習状況調査で、国語・算数とも、話の要旨を読み取ることに関する結果となった。要旨を読み取り、短くまとめるなどの活動を行い、言語能力を高めていく必要がある。算数においては、筋道を立てて論理的に考えていくことにも課題がある。自分の考えを発表し、交流する活動を増やして、論理的な思考力を鍛えていく必要がある。また、既習事項をどのように活用していくのかという点において課題があった。 	B	
○ノートづくり	<ul style="list-style-type: none"> ◆自分の考えや友達のことを記し、思考の流れを残すようにする。 ◆図や表を用いながら、問題文の物語や数量の関係をとらえたり、表したりできるようにすることで、式の意味理解を図る。 ◆めあてと振り返りを書き、自分について力を認知させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ◆ノートの基本的な書き方を学校で共有し、ノートコンクールを定期的に行うことで、児童にとっての理想モデルをイメージしやすくする。また、掲示することでお互いの工夫を見つけ、個人のノートづくりに反映させる。 ◆自らの考え、思考過程、理由、根拠を記述することを習慣化する。 ◆振り返りの観点を明確にし、めあてに対する自分の学びについて記入させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ◇漢字ノートコンクールに加え、今年は年間を通して算数ノートコンクールにも全校で取り組んだ。教師の価値づけの記述をつけたり友だちのノートを見比べたりすることで、よいノートづくりに活かすようになった。 ◇ICT機器の活用により、授業中の必要な時に自分の提示ができるようになり、ノートを使って発表したり、意見を交換したりする活動を授業に取り入れられたように感じた。 ◆図や表、グラフや関係図などを関連付けて、テーマ視覚化し、いろいろな角度から解法へとたり着きやすくする。 ◆既習事項をどのように活用すればよいのかを意識した授業づくりに取り組んでいく。 	B	
○読む力の育成	<ul style="list-style-type: none"> ◆音読表現を工夫することができる。 ◆課題に沿って情報を取り出し、イメージとして明らかにすることができる。 ◆言葉に関心を持たせ、語彙力を高める。 	<ul style="list-style-type: none"> ◆一つの言葉を手掛かりに段落相互の関係や文章構成に着目し、重要語句、登場人物の心情の変化、情景の変化など、教科の特性に合わせて、より焦点化させて授業を展開する。 ◆音読カードなどを活用して、継続的・段階的な音読指導を行い相互評価する機会を設ける。 	<ul style="list-style-type: none"> ◇各学年の国語科での学習の学びや作文・俳句の提示に対して、多くの子どもが興味を示している。友達の作品を通して言葉に関心を持つことは、語彙力や表現力の獲得につながっている。 ◆授業の中で、以前のように音読学習に取り組めるようになったので、今後も音読練習のやり方、通読や場面読みなど工夫していく。また、めあてを持って読むようにすることで、文章の内容理解につなげていく。 		
○根拠や理由に基づいて考える力の育成をはかるためのカリキュラムマネジメント	<ul style="list-style-type: none"> ◆理由や根拠を明らかにして、書いたり話したりすることができるようにする。 ◆場に応じた表現の工夫をさせる。 ◆友だちと共に考え学ぶことによって、新しい発見や豊かな発想が生まれる授業の工夫をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ◆課題に沿って考え、解決していくために、思考の流れに沿った学習活動を展開する。 ◆学習発表の場を設けたり、異学年交流をしたりする中で、相手・目的意識を持たせることで、表現力を伸ばす。 ◆プログラミング学習やタブレット等、ICT機器を生かした授業を積極的にすすめる。 ◆全校行事「はさまっフェスティバル」(3学期)において、教科学習を活かした発表をする。体験型ワークショップで、効果的な表現について学び、コミュニケーション能力を高める。 	<ul style="list-style-type: none"> ◇狭間フェスティバルを4年ぶりに保護者の方にも参加できるように開催した。どの学年も教科の学習を生かした発表を児童が積極的にアイデアを出して計画し、相手意識を持った発表を行った。 ◆授業のまとめや総合的な学習で、ノートやワークシートに加え、タブレットを活用した表現を児童自身で工夫できるようにしている。 ◇今年度は朝学習や週末課題にドリルワークを行うことで子どもたちはタブレットの基本的な使い方は身につけたが更なる活用の仕方について、各学年で身に付けておきたいスキルについて整理し、指導計画を作成する必要がある。教師間で有効な活用方法や場面を共有し、効果的に使えるようにしていく。 		
C 家庭学習の習慣の確立と充実	<ul style="list-style-type: none"> ◆家庭学習の手引きに基づき学級指導し、家庭へ配布、懇談などで啓発する。 ◆家庭学習が授業に活かされるような課題を工夫する。 ◆学校教育評価アンケートの、「子ども自身が家庭学習に取り組む」の項目において、75%の達成を目指す。 	<ul style="list-style-type: none"> ◆家庭学習の指標として、家庭学習の手引き「夢に向かって狭間っ子」を見直し、それを使って自主学習でどんな内容をどんなふう学習したらよいか、学年に応じた方法を児童に具体的に示し指導する。中高学年はタブレット端末を使った家庭学習の取り組みについても指導する。 ◆「漢字・算数ノートコンクール」や「自由ノートコンクール」などで、自分の学びを紹介・披露したり、友だちの学びからヒントをもらったりして、一人学びへの意欲をもたせるようにする。 ◆本校独自の振り返りシート「はさまっノート」で、家庭学習について振り返る項目を作り、学期ごとに自己評価するとともに、家庭との連携を高める。 	<ul style="list-style-type: none"> ◇「漢字ノートコンクール」や「算数ノートコンクール」さらに今年度は「自主学習ノート」の取り組みを全校生や保護者が目にする場所に掲示することで、他者のがんばりを認め、自分の学びに活かそうとする意欲につながった。 ◆家庭学習の手引きを配布したが、さらに自発的に取り組めるように、課題の精選、子どもたちの意欲を引き出す工夫をしていくようにしていきたい。 ◆進んで家庭学習や読書が今以上にできるように今後も家庭と連携を図る取り組みをしていきたい。 	B	
D 読書活動の推進	<ul style="list-style-type: none"> ◆本を読むことを楽しむ児童の増加を目指す。 ◆本を資料として活用し、必要な情報を選択することができる(本の紹介、調べ学習など)児童の増加を目指す。 ◆学校教育評価アンケートの、「家で読書や読み聞かせに取り組んでいる」の項目において、65%の達成を目指す。 	<ul style="list-style-type: none"> ◆学校司書・図書ボランティアとの連携をはかり、読書に興味をもてる工夫をする。 ◆読書通帳の活用や、ステージ別読書を行って、日常的に本に触れる機会をもたせる。 ◆各教科の中で、活用できる本(資料)を提示し、学習活動に広がりを持たせられるよう支援する。図書年間利用計画を各学年で作成し、年間の見直しを持って計画的に読書活動を進める。 ◆「狭間っ子読書の日」の週を読書週間とし、朝の帯時間を持つ読書タイムとすることで、読書活動を啓発・推進する。 ◆学校より、学年通信、司書より、図書日より通して親子読書の日の啓発を行い、家庭と連携して読書活動を進める。親子読書の取り組み方を具体的に示し、発達段階に応じて取り組めるように工夫をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ◇学校司書との連携により年間学習計画に必要な図書をクラスに用意したので、調べ学習等読書活動の広がりがつながり、図書を活用する機会が増えた。 ◇学校司書と担任が連携した取り組みで、友だちの本の紹介カードから刺激を受けて読書への興味が広がったり、読書通帳やステージ別読書に熱心に取り組んだり、意欲的な姿が見られた。 ◇図書ボランティアによる月2回の「おはなし会(読み聞かせ)」図書委員会が主催となった「図書まつり」がコロナ禍以前のように開催でき、多くの子どもたちが参加した。読書活動の啓発につながった。 ◆今年度は昨年度に引き続き、家庭読書の定着に向けて「親子読書カード」に取り組んだ。毎月負担なく取り組めるように内容を改定し「おやすみぬいぐるみ」を取り入れて子どもたちが楽しく記入できる形にした。来年度は、カードをもとにして毎月の読書週間→家庭読書の様子を交流するなど、読書活動の啓発に努めたい。 ◆在校生の保護者が図書ボランティアに加わり、活動が活性化している。図書ボランティアとの連携については、内容を検討しながら継続していく。 	A	
E 児童理解に基づいた指導体制の確立	<ul style="list-style-type: none"> ◆児童の実態に応じて研究テーマを設定し学力の向上させるための「教科に適切な授業展開・指導法を通して、子どもの思考力・判断力・表現力の育成を目指す。 ◆問題解決に向けて、学んだことを活用して思考を働かせるために必要な手立てを、意図的に講じる。 	<ul style="list-style-type: none"> ◆講師を招聘し全教職員が授業公開を実施する。 ◆研究授業では、事前研修会を持ち、研究課題を明らかにし、ワークショップ型の事後研修会により成果と課題を共有する。 ◆毎授業のふりかえりと次授業のめあての提示をする。 ◆問題解決的な学習を取り入れ、習得した知識を活用して深く考えたり自分の思いや考えを伝え合ったりするために必要な手立てを、系統立てて実施する。 ◆継続可能な外国語教育につながる活動を精選する。 ◆研究の方向性を明確にするとともに研究の価値を検証する。 	<ul style="list-style-type: none"> ◇教材に適した授業展開や指導法を工夫することで、児童は主体的に楽しみながら学んでいた。 ◇コロナ禍が明けコミュニケーションを伴う活動が十分にできるようになった。2人組やグループ、全体など話し合いの形態を使い分け意識的に授業に対話し取り入れた。さらにICT機器を用いるなどして、工夫して対話学習を取り入れることができた。 ◇今年度は授業公開を行い、参観し合い、事後に手立ての有効性を全員で検証することで、授業研究会での学びが次の研修に活かされた。 ◇児童の実態に合った研究テーマを探するために、指導内容・指導方法の研修を行い、来年度以降の研究の方向性について教師間で共通理解を図れた。 ◆児童の強みを生かし、弱点を克服できるような研究を進めていくことが大切である。 ◆今年度の研究で見えてきた児童の課題や今後の方向性を、来年度以降、具体的な手立てを検証して研究を進めていく。 	A	
○個に応じた支援を行う。	<ul style="list-style-type: none"> ○それぞれの教科や、教材の特性を踏まえた授業展開を通して、児童の総合的な力を育成する。 	<ul style="list-style-type: none"> ◆児童理解研修会を年度当初に行い、巡回相談や教育相談を積極的に活用する。 ◆研修資料の共通理解と共有行動を図る。 ◆各教科の得意な教科や分野、領域、指導法を交流することで、さらなる授業改善を目指す。 ◆ICTの研修を定期的に行い、効果的な活用方法を交流し、指導に生かすようにする。 ◆各委員会で児童の実態に応じて研修計画を立てて実施する。 ◆年間を通して行うとともに長期休業時有効的に活用する。 	<ul style="list-style-type: none"> ◇年2回の児童理解研修会で全職員が児童一人ひとりと共通理解する機会をもった。加えて毎月の職員会議や委員会など、あらゆる機会を捉え、児童の様子や変化を共有し、深い児童理解に努めた。 ◇各担当より、計画的に職員研修が行われた。ICT機器の活用についても、実践交流を行った。 ◆業務上の活用方法の研修を行った。 ◇ICT機器の活用については、授業への活用はもちろん業務への効果的な活用のためにもミニ研修をこまめにし、教員の資質向上に努める。 ◆職員の一斉に合った研修テーマを設定し、日々の教育活動に生かせる研修計画を立て、実践していく必要がある。 		
F 社会に開かれた教育課程を支える 風土の醸成	<ul style="list-style-type: none"> ○地域ボランティアと連絡を密に取り、相互に効果が生まれる連携。 ○教師の専門性を生かして、教科担任制を推進していく。 ○小学校と中学校とで、連携を強化する。 	<ul style="list-style-type: none"> ◆広い分野で多くの学校支援ボランティアの活用を推進する。 	<ul style="list-style-type: none"> ◆ボランティアとの交流を、単元構想に位置付けて、年間を通して計画的に行えるようにしていく。 ◆コロナ禍における連携方法を模索する。 ◆コーディネーター的な地域人材を発掘する。 ◆学校運営協議会において協議する。そして、それぞれの役割について確認していく。 	<ul style="list-style-type: none"> ◇感染対策を行いながら地域の方にミニボランティアとして学習支援をしてもらうことができた。また、図書ボランティアによる定期的な図書室の環境整備やおはなし会をってもらうことができた。見守り隊による校外学習の引率や登下校の安全指導など、温かく見守っていただいた。 ◇児童の学校生活の様子や行事や授業見学を通して見ていただき、学校運営協議会にて児童や学校運営について意見交流することができた。学校、地域、保護者がそれぞれの立場で、児童に対する役割や連携することの意義について話し合う機会を持つことができた。 ◆ボランティアの活用を単元構想に位置付けて年間を通しての計画ができていなかった。 ◆地域ボランティアと学校をつなぐ、コーディネーター的な人材を今後も探していく。 	
		<ul style="list-style-type: none"> ◆中学校を見通した、基礎学力の向上や中学校への円滑な移行を図る。 ◆小中連携の強化(相互校の実情理解、児童会生徒会交流、生徒指導情報共有など)をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ◆教科担任制の充実を図り、小中一貫カリキュラムを作成する。交換授業による教科担任制の授業を実施する。 ◆中学校からの出前授業を実施し、円滑な小中接続に努める。 ◆本校の研究授業や研修について、中学校にも案内し交流する。 ◆生徒指導上の情報を共有し、連携を深める。 ◆特別支援教育コーディネーターの交流をおこなう。 ◆取り組みの評価を共有し、それぞれの学力向上につながるような指導、連携作りに努める。 	<ul style="list-style-type: none"> ◇教科担任制の授業を実施できた。 ◇本校の授業に中学校の教員が参加し、交流することができた。 ◇中学校の出前授業として社会科の授業を体験し、生徒会による中学校の紹介を行ってもらった。また、中学校のあいさつ運動や武庫小6年生との交流などにより、円滑な小中連携を図ることができた。 ◇授業見学など発幼との交流を図ることができた。 ◇中学校校区の生徒指導担当会を定期的に実施し、情報交換を行い、連携することができた。 ◇発幼小中連携の会などにより、取り組みの評価を共有することができた。 ◆特別支援教育コーディネーターの情報交換は連絡をとるなどして行ったが、対面交流ができていなかった。 ◆小中一貫カリキュラムについては、継続作成中である。 	B